

雑種的思考の可能性について

西 成 彦

カフカが遺した膨大な原稿は、カフカ自身の意に反して、今日まで生き延びることができた。何者かの意思に反して生き延びること。あるいは生き延びさせること。ここで最初に紹介したいカフカの遺稿の中の断片は、まさに「雑種性」という烙印を押された存在をめぐるカフカの憂慮をあらわした、その「雑種」の記憶を生き延びさせるためのテキストである。

「猫に出会うと逃げ出すが、小羊を見ると、おそいかかろうとする」 — この二重の本能を背負った「雑種」はあたかも「脱亜入欧」をめざしながら、その目標を十分には達成しないまま、まさしく「雑種」として生き延びてきた近代日本のカリカチュアではないかとさえ思える寓意である。

日本文化の雑種性については、それを日本文化の基層とみなすか、逆に、純血文化の保存を困難してきた外圧の結果だとみなすかは別にして、日本文化の特質を考慮するときになれひとりとして見逃すことのできない歴史的既成事実である。しかも和漢折衷の混血文化の上に成立した日本文化は、明治以降、今度は和洋折衷の新たな雑種化を徹底的に推し進めた。

ブラハのユダヤ系ドイツ人として生まれ育ったカフカが「雑種」の中に暗澹たる未来を見たのに対して、日本という「雑種」はその「雑種性」を強調することで、むしろ生き延びても来たのだ。少なくとも、そう考えることに、日本人はきわめて抵抗を持たない民族のひとつであると想像することができる。加藤周一さんの『雑種文化』という本などはその典型ともいえる本である。

しかし、いったい日本的雑種性とは何なのか？

日本文化の「雑種性」を認めることについては各かではないはずの日本人は、はたして「雑種性」に

ついて、その問題を深刻に受け止めながらみずからに正しく問ってきたか否か？

今回のシンポジウムにおいては、主に大正末期から戦後にかけての日本が「雑種性」をめぐる、どのような思考を産み出したのか？そして、それが欧米世界（特にアメリカ大陸）における「雑種性」をめぐる思考とどう交錯しうる射程を持っていたのか？そして、二十一世紀に向けて、「雑種性」をめぐる過去における思考の遺産を私たちはどう継承していくべきなのか？ — これらの問題を問ってみたい。

そこで、私は一九二〇年代の作家の一人、宮沢賢治を取り上げながら、彼にとって「雑種性」とは何であったのか？を問うことで、今日の議論の口火を切る発話とさせてもらおうと思う。

*

「注文の多い料理店」 — そこには一方で獰猛さを残しながら、他方では西洋かぶれのグルメ趣味に侵されたハイカラな山猫が登場する。歴史的な異文化接触のプロセスの中での味覚の変容 — これは宮沢賢治を考えるとときにきわめて重要な問題のひとつで、たとえば狩猟民族にとっての「栗餅」 — マタギ暮らしの山男にとっての「鮎」 — 猛禽類にとっての「絶食」 — 宮沢賢治の文学に登場する動物や人間は、異文化接触を契機として、かならずといていいほど、みずからの食生活の変革を試みることになる。「注文の多い料理店」の山猫も、この点においては、典型的な「近代主義者」なのである。

しかし、「注文の多い料理店」では、この山猫が、やはり「近代主義者」であるという点においてはさらに先端を行く「東京から来た紳士」と真向から対決することになる。二人の紳士は、食べるため

に狩猟をすることを「ファッション」としてのみ生きようとする乱暴な消費者としての仮面をかぶった「近代主義者」である。

ここで私たちは近代の所産である二種類の「雑種」に遭遇したことになる。それぞれに「狩猟＝捕獲」に攻撃的本能のはけ口を求め、しかもただ食べるのではないグルメ的な食習慣にとりつかれ、またまがりなりに日本語を話し、しかも看板に英語を書き加えたり、英国風のファッションに身を固めたり、舶来嗜好をそれぞれに分有する「雑種」。

しかし、私たちはここで「雑種性」をめぐる思考をついつい閉じてしまいがちになるのだが、私はこの程度のバタ臭さを見出しただけで宮沢賢治をめぐる議論を終らせるべきではない — というのが私の考えである。

いったい、私たちは山猫の末裔なのか、英国風紳士の末裔なのかと問うこと — カフカが言った「複数の胸騒ぎ」で胸を一杯にするということは、まさに「注文の多い料理店」を介して一触即発の関係に陥った山猫の胸騒ぎと英国風紳士の胸騒ぎとで胸を一杯にすることに他ならないのである。

日本文化の雑種性をめぐる議論が、これまで日本において不毛に終わってきたのは、和漢だの和洋だのといった折衷可能な異文化の混交のみを日本文化の特質としてみることで、日本の歴史を彩ってきた、異文化衝突の暴力を見届けずに終わらせてきた怠慢のせいである。

日本人とは山猫の悪知恵に手を焼く猟師たちのことではない。山猫の反抗に驚くことによって、森の動物たちの尊敬に気がついてみせることで、多少なりとも環境保護論者へと変貌する都会人のことでもない。時には武装した鉄砲打ちを向こうにまわして、ゲリラ的な戦法を試みる山猫もまた日本人であったし、思いこみの激しい単細胞な人間の欲に訴えかけて、まんまと相手をたぶらかした悪徳詐欺師もまた日本人であった。

宮沢賢治が創造したイーハトヴは、植民地主義帝国日本の縮図であり、私たちは決して都会人の立場にだけ立って山猫の野蛮さを断罪することはできない。かといって山猫の正当防衛を一方的に主張するわけにも行かない。あるときは英国風の紳士に

化け、あるときはワイルドキャットを演じもし、そうしながら、文明開化期を生き、日本帝国主義時代を生き、プロレタリア労働運動を生き、さらに戦後の今もまた生き続けている存在たちの胸騒ぎ。

私たちは単純に都会の紳士でもなければ、森の山猫でもない。しかし、この一触即発の関係の中にある二者の決して中和されることなどありえない不釣り合いな胸騒ぎを分有することで、ほんとうに「雑種」的な存在へと変貌する契機を見失わないこと。

ここで深入りするつもりはないが、日本国という名の「国民国家」の周縁部で、小文字でしか言いあらわせないような「マイナーな日本人」の胸騒ぎを、「日本国民」の胸騒ぎにつきつけること。たとえば、従軍慰安婦問題や沖縄問題、ハンセン病患者や水俣病の問題、これらの問題を、「日本人」の雑種化の格好の契機とみなすこと。

*

実は童話集『注文の多い料理店』は、はじめ『山男の四月』と題される予定だった。いまではあまり読まれることのない童話だが、よく読むと不思議な気分になる童話だ。

これには「山男」がひとりと「支那人」がひとり敵役同士として登場する。二人にとって日本は決して居心地のいい国であったわけではなかったらしく、「山男」は山鳥を売りに「町へはひつていくとすれば、化けないとなぐり殺される」と感じている。「支那人」の方も「きさまが町へはひつたら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだとどなつてやる」と脅されると、急にめそめそして、「それ、あまり同情ない。わたし商売たたない。わたしおまんまたべない。わたし往生する」と泣き落としにかかると。要するに、だれもが人を化かしたり化かされたり、脅したり脅されたりしながら生きている。これら「マイナーな日本人」の胸騒ぎ — 「山男」の胸騒ぎや「支那人」の胸騒ぎをただしく胸の中に位置づけること。

「山男の四月」には「山男」でも「支那人」でもない「日本国民」は傍役以外では登場しない。しかし、この物語は単に「日本国民」のステレオタイプ

な「山男」観・「支那人」観を引用しただけで終わった話ではない。

この物語の中で、「支那人」は六神丸という漢方薬を売り歩く行商人として設定されている。しかも「支那人」はこの「ながいきの薬」を製造するのに、上海でもイーハトーヴでも純朴な人間をだまくらかして、魔法で人肉を丸薬に変えながら歩いているのである。一方、「山男」はと言えば、宮沢賢治のもうひとつの童話「なめとこ山の熊」を読めば分かるように、もし彼が銃を手に入れたなら、熊を撃ち殺して熊の胆を売って、山鳥一羽どころではない、ある程度まとまった金を手に入れたかもしれない。彼は銃を持たないから、やむなく「両手をちぢめて、鉄砲だまのようにからだを投げつけ」、特攻隊のように突進していただだけだ。そして、そんな「山男」が六神丸となって、虚弱体質の日本の子供がそれを服用する。

いったい童話「山男の四月」を読んだ日本の子どもは、平然と、六神丸を口にすることができるだろうか？

私たちは「山男」をなぐりころすかもしれないし、「支那人」の悪徳商法に脅威を覚悟もする、そんな日本人の胸騒ぎをも言うまでもなく分有できる。かといってその胸騒ぎだけをしか胸の中に宿すことのできない日本の読者は、極端な差別主義者以外にないだろう。

「日本人に化ける山男」と「たどたどしい日本語を話す支那人」と「童話好きの日本の子ども」——いったい私たちの胸はいくつの胸騒ぎを宿すべく開かれているのだろうか？

「山男の四月」は、「山男」と「支那人」と「日本人」の胸騒ぎを共にかきならすために仕組まれた童話なのである。

*

雑種性とは単に異文化折衷の流儀のことではない。暴力と不安と恐怖を介しながら歴史的に出会い、衝突し、不和を生き、分断を生きてきた、さまざまな存在の胸騒ぎを分有することによって胸が張り裂けそうになる精神の状態。その状態をただしく記述

することでみずからを歴史的に位置づける語りの探究。さいわい今日この種類の雑種の未来は、暗澹たるものではない。

私は個人的にはこのような精神の状態、学問的姿勢のことを、「クレオール的」と呼びたいと思っている。

「山男」でもなく、「支那人」でもなく、「日本人」でもなく、「クレオール」であると言える感性を身につけていくこと。

あるいは、私の中には「紳士」と「山猫」——「山男」と「支那人」と「日本人」がいると言える場を開いていくこと。

こうした雑種の思考の萌芽が一九二〇年代の東アジアで、アメリカで、どのように芽吹いていったのか。

私たちはせっかく芽吹きそうになったこの思考方法が、国家暴力によって、あるいは民間暴力によって、幾度も圧殺されてきた経緯についても知らないわけではない。しかし、そういった暴力に対して、中野重治や日本のモダニストたちは、日系移民は、あるいは合衆国の詩人はどう戦ったのか。

これからそれぞれの立場からお話しいただく四人とともに考えていきたい。

配布資料

Ich habe ein eigentümliches Tier, halb Kätzen, halb Lamm. [...] Es hat beiderlei Unruhe in sich, die von der Katze und die vom Lamm, so verschiedenartig sie sind. Darum ist ihm seine Haut zu eng. (Franz Kafka)

I have a curious animal, half kitten, half lamb. (…)

It has both restlessnesses in itself, that of the cat and that of the lamb, diverse as they are. That is why it feels unhappy in its own skin.

私のところに半ば猫で半ば小羊という奇妙な動物がいる。(…) そいつには猫と小羊のかけはなれた胸騒ぎが二つも宿っていて、あまりにも窮屈すぎではちきれそうだ。

*

I'm just a red nigger who loves the sea,
I had a sound colonial education,
I have Dutch, nigger, and English in me,
and either I'm nobody, or I'm a nation. (Derek Walcott)

私は海を愛する赤色のニグロだ
私はまっとうな植民地の教育を受けた
私の中にはオランダ人とニグロと英国人がいる
そして私はダレデモナイか、あるいは一個の民族だ

*

Ni Européens, ni Africains, ni Asiatiques, nous nous
proclamons Créoles. 〈…〉 Puisse ce positionnement

leur servir comme il nous sert.

(Jean Bernabé, Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant)
Neither European, nor African, nor Asian, we proclaim
ourselves Creoles. 〈…〉 May this positioning serve them
as it serves us.

ヨーロッパ人でもアフリカ人でもアジア人でもなく私
たちはクレオールであると宣言する。〈…〉このポジシ
ョンのとりかたが彼らにも役立てばいい。私たちに役
立つのと同じように。